

「忘れねばこそ

思い出さず」とは理におちているが、芦高に対する私の気持を、或程度あらわしている。時間的にもつと経つとか、空間的にいくら離れるとか、または異質的な仕事をしているとかであれば、回顧や印象はもっと強まるのであろうが、単的に云うと、まだ芦高にいるようで、とんと筆が進まぬことになる。それよりも、芦高を去ったことが、生涯をかけた教員生活をあまりにも無造作に、さよならしたことになり、空しく県教委の表彰状を眺める。と言っても、そのような感懐に、この与えられた義務的なスペースを割くことは許されそうにもない。

飯野校長のあと

をうけて、私が芦高に着任したのは、六甲がかすみ、六麓荘から霊園にかけて、らんまんと花の咲く、昭和三十一年春四月十六日であった。陽気のかげんか発令が半カ月おくれていた。去んぬる十五周年記念式に、東播校長を代表して参列をしたことはあっても、芦高とは初対面に近い。飯野前校長と私との歓送迎の挨拶に、国道の横断でまごまごしたと云ったら、飯野先輩はそんなことを云うなと私をたしなめた。そうだ、それはわかる、私も大阪で十五年も勤めたのだから。

着任所感

をザラ紙二枚に発表した。わが芦高が創立後わずか十六年にして、県下屈指の有名校にまでなったのは、全く先輩の努力精進のためものである。然し創立の日が浅いのに無理な注文だが、はでやかな中に、伝統のもつ根性が欲しい。芦高の自由と云う解放的な考えに、秩序と規律の筋金がほしい。興味もよいが努力主義も尊い—ああもどかしい—もつと単的にいえば、火のゆるような勉学をせよ。そして進学率を上げよ。芦高は私の云う通りにしても、決して受験準備だと指弾されることはない。公立大学への進学者が、たった四十数名（今は大いに違う）ではどうする。学級編成も一考を要するのではなからうか—私のこうした所見は、或は早きに失して、一部の人の共感を得なかったかも知れぬ。或は波及して、記念祭日程短縮の因となって生徒会で不平が出たかも知れぬ。中には野球の不振に結びつける者があつたかも知れぬ。けれど私は、芦高の進学率倍加の主張はゆるめなかった。今もお高らかにそれを叫ぶであろう。

「高校 生

その真実を求めて」は快心の著作であった。集団教育的機構の学校にあって、生徒の座において、一対一で、生徒の心の伴侶となるようにと、この編集を思い立ち、内は衣笠・木谷その他の諸君、そとは蔭山主事・高校長などと、苦心を重ねたものである。このごろその改訂版が出るとか。芦高と云えば野球、野球と云えば芦高と云われたほどの野球もやや停滞ぎみで石田君が気のどくがって「先生の在任中に一度は」との念願が叶ったが、三十三年の春に県代表になったが、二回戦で負けたように思う。競技と云えばそのころラグビー・バレー・庭球などが成績を上げていたが、いま一息というところであった。とまれ芦高の特別教育活動は、実に整然として天下に誇るほどのものである。

校舎の印象

は卒直にいうと、「思ったより貧弱な」という一語につきる。もつとも、この言葉は、芦屋市当局の苦心や、宮川の方々が子達の愛着する校舎をゆずられた心境や、また別の方面では、芦高の育友会の各位が、出費がかさむのに、こまごまと設備に心されて来たのを無視するものではない。現に私が就任してからでも、食堂が新設されたり、櫛の緑蔭を除いて図書室の増築が行なわれるなど、すべてが育友会に負うところであった。

中棟増改築

はかくて必須である。増改築については別に詳記するとして、ただ一事、地元負担が相当多額なので、これには衣笠教頭・近藤事務長らと苦心をしたものである。一部は市に依頼し、その他は借りてしのぐとしても、その大部分を父兄に仰がなくてはならない。設備資金の月額二百円増は育友会負担の限界である。増額案の総会通過については、多少の不安感をいだいていたが、みなさんに心よく賛成が願えたので、私はほっとしたのである。ひとりこのことだけでなく、私の任期中のすべてについて、育友会が協力の手をのべられたことは、学校運営の上から、芦高にとつても、私にとつても、幸福なことであった。いま私は、育友会から贈られた二枚折の屏風を前にして、思わず目がしらの熱くなるのをおぼえる。

華やかな同窓会

は、私のまわり来たった学校のそのいずれよりも、出席者数において、その催しの内容において、すぐれていると判断した。それを単に創立が新しく、みんなが若いからと結論づけるのでなく、芦高のよさがここに溢れているとみるべきであらう。翠ヶ丘北住宅一―二〇にあって、こう追憶の糸を繰ると冒頭のにえ切らぬ言葉を裏切つて思い出がはてしない。老妻が机のかたわらで、問いもせぬのに、芦高のひとり語りをしている。このアパートを訪う人もみな、芦高にゆかりのある人々である。洋間の四畳には、芦の葉会の丹羽氏のご主人の絵もかけてある。故郷の私の家では、一間は芦高もしくは芦屋のもので飾られている。校門の横のさくらの孫生（ひこばえ）は、私の家の前庭に移されて、背丈ほどに伸びている。そしてこの樹齢にかけて、芦高のことは、子から孫へと言ひ伝えられることであろう。今年三つの孫娘が、この間も「暖かくなつたら芦屋へ行こう」とかたことで云っている。芦高に幸あれ！